

## ゼカリヤ書4章6節 「わたしの霊によって」

### 1A 「権力によらず」

1B ペルシヤの支配下

2B 貧弱な武力

### 2A 「能力によらず」

1B ソロモン神殿にあった豊富な人材

2B 貧弱な財務

3B 自分の家を建てていた民

### 3A 「わたしの霊によって」

1B 御霊にある力

1C 肉の思いに対して

2C キリストの証しに対して

3C 教会の働きに対して

2B 尽きない恵み

1C 肉による完成

2C 何も出来ない肉

3C キリストにある力

## 本文

ゼカリヤ書4章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは、ゼカリヤ書2章まで来ています。午後礼拝で3-4章を一節ずつ読んでいきますが、今朝は、4章6節に注目したいと思います。「すると彼は、私に答えてこう言った。「これは、ゼルバベルへの主のことばだ。『権力によらず、能力によらず、わたしの霊によって。』と万軍の主は仰せられる。」そうです、ここは私たちの教会の週報に、ずっと掲載している御言葉です。私たちには、自分の目の前に山のように見える、立ちはだかっている問題や課題を見ることがあるでしょう。ユダヤ人の総督ゼルバベルは、神殿再建について、山のように積み上がっている問題に直面していました。しかし、主がそれをご自分の恵みにとって、動かしてくださることを約束されています。7節に、「大いなる山よ。おまえは何者だ。ゼルバベルの前で平地となれ。」と主は言われています。大いなる山であっても、神の恵みで平地となることを約束されています。それをしてくださるのが、主の御霊です。権力でもなく、能力でもなく、主の御霊が動かしてくださいます。

### 1A 「権力によらず」

ゼルバベルは総督であり、政治における指導者です。宗教における指導者は、大祭司ヨシュアがいましたが、ゼルバベルは、礼拝であるとか、律法であるとか、そういった事柄についての指導

を与えたわけではありません。ユダヤ人がエルサレムとその周辺のユダの町々で、彼らの政治的、行政的な代表者として、ペルシヤから任命されていました。ですから、彼にとっての関心事は、具体的な事柄、例えば、ユダヤ人の安全保障であるとか、住宅のことであるとか、経済事情であるとか、そのような具体的な事柄についてです。その中で彼の大きな関心事は「権力」と「能力」でありました。新改訳は「権力」と訳していますが、意味合いとしては新共同訳の「武力」がふさわしいです。ユダヤ人は、周囲の敵に囲まれていました。いつも安全が脅かされていました。それで、彼らが安心して暮らすことができるためには、武力を持たねばなりません。そしてもう一つは、「能力」であります。これは今の言葉で言えば、「人材」でしょう。あるいは物の「資材」も含まれます。ヒューマン・リソースなんていう言葉がありますが、人間にしろ、物にしろ、何かのプロジェクトを成し遂げるための必要な人力や資源であります。私たちは、いつも、その力を必要としていますね。人はいるだろうか？財力はあるだろうか？そして、周囲の人々は自分のしていることを受け入れてくれるだろうか？

### 1B ペルシヤの支配下

ゼルバベルとヨシュアが建てた神殿は、歴史や考古学で「第二神殿」と呼ばれます。それは再建した神殿だからです。第一神殿は、もちろんソロモンの建てたものを指しています。第一神殿の時と比較すると良いでしょう。政治の力と言えば、それは天と地の差がありました。ゼルバベルが治めていた時は、ペルシヤの支配の中にいました。彼はダビデ王朝の末裔です。彼は王になることのできる身分を持っていました。けれども、ペルシヤの国の中での役人の一人、総督にしかすぎませんでした。ユダヤ人を治めていると言っても、あくまでもペルシヤ帝国の中での、小さな、ユダヤ人共同体を治めているにしかすぎません。小さな、自治政府ではあっても、主権国家では全くありませんでした。

彼らは、主の憐れみによって、ペルシヤの初代王であるクロスによって、神殿を再建する命令を受け、エルサレムに帰還しました。しかし、彼らは元独立国に戻って来たわけですが、彼らが神殿を建て始めた時に、それに反対した人々は彼らが王に反抗している、独立しようとしていると首都の王宮に報告されてしまったのです。彼らの王に対する手紙には、こう書いてあります。「エズラ 4:15-16 あなたの先祖の記録文書をお調べになれば、この町が反抗的な町で、王たちと諸州に損害を与え、また昔からこの町で反逆が行なわれたことを、その記録文書の中に見て、おわかりになるでしょう。この町が滅ぼされたのも、そのためです。私たちは王にお知らせします。もしこの町が再建され、城壁が修復されたら、あなたはこのために川向こうの領土を失ってしまわれるでしょう。」自分たちが、ただ自分たちの神に対して宮を建てているのに、それがペルシヤの王への脅威になると言い伝えられたのです。

私たちはいかがでしょうか？キリスト者であるというだけで、受ける圧力があります。私たちはキリスト教会として、賃貸で場所を借りたり、どこかの不動産を購入しようとするならば、ただキリスト

教だということだけで、お断りされることがよくあります。そうした団体が来ると、他のところが入らなくなるとか、いろいろ否定的なことを大家さんがお考えになるからだろうと思います。私は、そういった方々の意志を当然ながら尊重したいですが、私たちがするはずもないことを、周囲の知らない人々は想像して、脅威に感じて、いてほしくないと思うわけです。こういった意味では、ペルシヤの支配の中にあるユダヤ人共同体と共通項があるでしょう。

その反面、第一神殿の時、ソロモンの国は隆盛を極めていました。その地域一帯において大国となり、ソロモンは王に即位してから間もなくして、南の大国エジプト王パロの娘と結婚しています。エジプトという大国と平和でいるための政略結婚なのですが、それはエジプトと対等な関係であったことを意味しています。そして、周辺の国々は貢物を持ってきました。ペリシテ、モアブ、アモン、アラムなどです。そしてレバノンの王とは、レバノン杉の提供を受け、神殿の工事にも職人を送ってもらいました。このようにして、地域大国となり、もちろん神殿建設においては、脅威も何も受けていません。

## 2B 貧弱な武力

そして総督ゼルバベルは、苦い経験があります。今、お話した反対者らの手紙を当時のペルシヤ王アルタシャスタが読み、神殿も、エルサレムの町も再建されないようにせよとの命令を出しました。すると、反対者らはその書状の写しを持って来て、「急いでエルサレムのユダヤ人のところに行って、武力をもって彼らの働きをやめさせた。(エズラ 4:23)」とあります。武力に対して、彼らは何の力も持ち合わせていませんでした。力を持っているほうが、実効支配できますね。ネヘミヤ記においても、その当時は城壁の再建でしたが、サマリア人の軍隊がやって来てきました。そしてアモン人トビヤが、こう言ってあざけていました。「彼らの建て直している城壁なら、一匹の狐が上っても、その石垣をくずしてしまうだろう。(ネヘミヤ 4:3)」このようなあざけりを受けても、何も言い返せない状態でした。ネヘミヤが総督の時にそうですから、ましてやゼルバベルの時は何にも自分たちを守るものはなかったに違いありません。

ですから、これらの権力あるいは武力が、ゼルバベルにとっては、喉から手が出るほど必要だと感じていたのです。ところが、主がそれを否みました。「**権力によらず**」と言われたのです。私たちは、神を信じる者たちとして、そうした血肉の力、物理的な力が与えられる保障は、必ずしも与えられていないのです。

## 2A 「能力によらず」

### 1B ソロモン神殿にあった豊富な人材

そして次に、「能力によらず」の背景を辿ってみましょう。ソロモンが神殿を建てる時には、あまりにも豊富な人材と資材がありました。次のように列王記第一に書いてあります。「1列王 5:13-18 ソロモン王は全イスラエルから役務者を徴用した。役務者は三万人であった。ソロモンは彼らを一か

月交替で、一万人ずつレバノンに送った。すなわち、一か月はレバノンに、二か月は家にいるようにした。役務長官はアドニラムであった。ソロモンには荷役人夫が七万人、山で石を切り出す者が八万人あった。そのほか、ソロモンには工事の監督をする者の長が三千三百人あって、工事に携わる者を指揮していた。王は、切り石を神殿の礎に据えるために、大きな石、高価な石を切り出すように命じた。ソロモンの建築師と、ヒラムの建築師と、ゲバル人たちは石を切り、宮を建てるために木材と石材とを準備した。」とんでもない数の人々が、一大プロジェクトに関わっています。徴用された役務者が三万人です。そして、荷物を運ぶ者たちが七万人です。石を切り出す者たちが、八万人もいます。神殿は石で造られますから、そうとうな量が必要です。今でもエルサレムに行けば、第一神殿の時の石切り場の跡を見ることができます。そしてソロモンのほうにも、レバノンの王ヒラムのほうにも、優れたプロフェッショナルな建築師がっていました。彼の国の予算は、ほとんど無尽蔵に使えるものがありました。

## 2B 貧弱な財務

対して、ゼルバベル率いるユダヤ人たちは、どれだけの人材と資材があったのでしょうか？神の憐れみがありました。ペルシヤのクロス王は、ネブカデネザルがかつてエルサレムから奪い取った、神の宮からの器類をゼルバベルに返却しました。「エズラ 1:9-11 その数は次のとおりであった。金の皿三十、銀の皿一千、香炉二十九、金の鉢三十、二級品の銀の鉢四百十、その他の用具一千。金、銀の用具は全部で五千四百あった。捕囚の民がバビロンからエルサレムに連れて来られたとき、シェシュバツアルはこれらの物をみないっしょに携えて上った。」これらは、神殿礼拝において、とても大切な器具類であり、本当に助かったことでしょう。

しかし、箱物がありません。つまり、建造に必要な物資です。もちろん、石などは当然、重いので現地で調達しなければいけませんから、購入代金が必要です。それで、エルサレムには帰還しない残った民が、金や銀、財貨、家畜をもって援助するようにクロスが命令しています(1:4)。ですから、比較的財力のある仲間から、少しずつの援助を受けて出発したのです。けれども、神殿を建てるわけですから、非常に大きな費用となります。彼らのかなり乏しい予算で建築しなければいけませんでした。

## 3B 自分の家を建てていた民

そんな中で、民は工事に携わっていましたが、そのため仕事もおそらくできなかつたでしょう。家計は苦しくなっています。そのような時に、周囲住民からの建設阻止行動がありました。これで、主はやめなさいということなんですね、とあきらめたのです。そして自分の仕事を再開することができました。そして心は自分の家を建てよう、マイホームを！ということで日数が経っていきました。ところが、主の介入があり、いろいろあくせく働いているのですが、実は収入が上がることはなかつたのです。だから、ますます焦って働きます。それで神殿建設に携わろうとする人々は、ますます少なくなっていたのです。そんな時に、預言者ハガイが、主が叱責する預言を語ったわけです。私

たちは先々週、その箇所を読みました。

そんなことで、人材も資材もなかったのです。「能力」がなかったのです。ゼルバベルは、人材や資材にも喉から手が出るほどの渴きを覚えていました。ところが、主は、「**能力によらず**」と言われたのです。動ける人がどれだけいるか、お金がどれだけあるか、そういったものにはよらない！と言われるのです！

### 3A 「わたしの霊によって」

では、何によればよいのか？「**わたしの霊によって**。」と万軍の主は、言われます。神の霊、御霊は、どれほどの方なのでしょう？そんなに力がある方なのか？欠けたところを、満たすことができる方なのか？聖書には、この方のとてつもない力、命、この方から出て来る尽きない恵みと富を話しています。詩篇 104 篇 30 節には、主の御霊によって、地上の生き物がすべて造られたと教えています。「あなたが御霊を送られると、彼らは造られます。」これだけでも、すごいですね。そして、主の御霊は、何でもおできになる方、全能であります。御使いがマリヤに言いました。「ルカ 1:35 聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」いと高き方の力が聖霊が臨む時に与えられます。それで処女が妊娠するというのを、主は行われたのです。とてつもない力です。そして、御霊が無限にイエス様に与えられました。「神が御霊を量っては与えられない。(ヨハネ 3:34 直訳)」御霊のなされることは、どこかで制限がないということです。満たしたら、溢れてくださいます。

### 1B 御霊にある力

私は、どうしても物理的な力、そして人材や資材に目が留まってしまう。それらは、あまりにも制限があります。しかし、主はその制限の中で、無制限の力を流してくださいます。どうしても、制限を見てしまいます。五千人の給食の奇跡の時に、弟子たちが五つのパンと二匹の魚を見ていたのと似ています。けれども、そこに主がおられたら、その五つのパンと二匹の魚で、五千人の男たちを満腹させることができたのです。

### 1C 肉の思いに対して

私たちは、そのような御霊の力を受けているので、自分の目の前に立ちただかる大きな山みたいなものが、平地になるような体験をすることができます。私たちにとっての山は何でしょうか？キリスト者としては、「肉としての自分」です。イエス様を信じて、神の恵みによって救われました。しかし、今の自分を見ると、信じる前と何ら変わっていないのではないかと落胆する時があります。自分の無力さを徹底的に感じる時があります。けれども、主は御霊の力の約束をくださいました。「**いうのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にはなく、御霊の中にいるので**



す。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。(ローマ 8:7-9)」

肉によれば、神を喜ばすことはできないのです。神の命令に従えないのです。初めから、聖書は私たちの努力で神を喜ばすことはできない、と断言しているのです。それはまるで、自分の髪の毛を引っ張って、宙に浮かせているようなものです。しかし、私たちは肉の中にいるのではない、神の御霊の中にいるという、すばらしい約束があります。ですから、御霊に導かれれば、肉の行ないを殺すことができると言っているのです。

### 2C キリストの証しに対して

そして、私たちは圧倒的な無力感を味わうのは、自分の周りにいる圧倒的多数の、救われていない魂のことを思う時です。私たちキリスト者の日本人口の割合は一割未満です。数百人の人たちの中に、一人が信仰者ということです。大きな山に見えます。そして、どうでしょうか、たった一人の人の救いが、途方もなく難しく見える。いや、不可能に見えることがあります。そこで、キリスト者は喧々諤々、どうしたら人々が信じてくれるのかを議論します。でも、自分が救われた時のことを思い出してください、誰か何かをしたから信じたんでしょうか？いや、自分が信じることについて、どう考えても、あり得ない！と思われることが満載ではないですか？御霊によって救われたのです。主が救われたのであり、自分の頑張りや行ないではありません。

イエス様は、弟子たちに約束されました。「使徒 1:8 しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」聖霊の力です。この力は、ギリシヤ語でデユナミス、英語のダイナマイトの語源です。その力を受けるので、地の果てにまでイエス様の証人となる、ということです。聖霊の力によって、イエス様が生きておられることを、自分の言葉や行ないで示すことができるということです。聖霊によれば、人が十年考えて、「なぜ、この人が救われないのだろうか？」という疑問や落胆に対して、一秒も必要とせず、全て解決してくださいます。これは、体験するしかありません。理屈ではありません、大きな山が一気に平地に変わるのです。私たちは、何をしなければならいのかと言え、聖霊を求めることでしょう。「ルカ 11:13 してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましよう。」

### 3C 教会の働きに対して

そして教会の働きは、どうでしょうか？まさに、ゼルバベルが直面していることに、私たちも具体的なことで直面します。新たな場所で教会をするには、財力がない。何か、教会でイベントを行ないたいが、人が足りない。絶えず絶えず、奉仕をする人々は欠けているという思いが出てきます。しかし、主は御霊の賜物を、教会の奉仕のためにくださいます。「1コリント 12:4-7 さて、御霊の賜物にはいろいろの種類がありますが、御霊は同じ御霊です。奉仕にはいろいろの種類があります

が、主は同じ主です。働きにはいろいろの種類がありますが、神はすべての人の中ですべての働きをなさる同じ神です。しかし、みなの益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。」主が求めておられるのは、捧げられた魂です。主は、ご自分に捧げる者に、御霊を注いでくださいます。多くの方が、御霊の力を得たいと願いますが、得るのではなく、自分を捧げるのです。そこで、不足が生まれます。自分にはできないと思います、ゼルバベルのようにひたすら、不足を感じるでしょう。けれども、だからこそ主はその欠けたところを満たし、また溢れさせてくださるのです。御霊に満たしてくださいます。そして、御心のままに賜物を与えてくださるのです。

## 2B 尽きない恵み

### 1C 肉による完成

このように、主の恵みは尽きません。しかし、私たちは主がなされることには、限界があるかのように思い、自分自身で神の願われていることを自分の力でやり遂げようとしています。しかし、主はそのことを嫌われます。主は、ご自分の始めたことを、ご自分で完成したいと願われています。ガラテヤ人たちに、パウロは警告しました。「ガラテヤ 3:3 あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。」御霊がなされているのだから、御霊に留まっている必要があります。こうすれば、うまくいくのではないかと思ってしまうのです。けれども、その中に入れば、クリスチャンとして迷宮入りします。自分がもがけばもがくほど、沈んでいっているのに気づきます。

### 2C 何も出来ない肉

しかし、主は憐れみ深い方で、私たちが落ちるままにされます。なぜなら、主は、私たちが自分の肉の力では何もできないことを知らない、主の御霊に拠り頼もうとしないことを知っておられるからです。「わたしから離れては、あなたがたは何もすることができないからです。(ヨハネ 15:5)」キリストから離れては、何もすることができないという言葉、言葉では分かるでしょう、けれども、「何もできないのだ」ということを知るまでには、意外に時間がかかります。自分ではどこかで、何かできるはずだと思っているからです。しかし、本当に自分は落ちた、だめだ、これ以上、前に進めない、そうした何も出来ないというところに至るまで、主は待っていてくださるのです。

### 3C キリストにある力

そうすれば、主はようやく働かれることができます。主が働かれる時は、何もできない自分が、ただ主の御霊に自分をまかせている時に事が動きます。それは、全くの神の恵みです。自分がしたということが、まるでありません。主がしたのでなければ、あり得ないということです。パウロは、貧しい時もありました。富んでいる時もありました。そんな時、いろいろもがいたことでしょう、心が上下に動いたことでしょう。けれども、そのようなことを通して、それでも主がおられることを学びました。それでこう言っています。「私は、私を強くしてくださる方によって、どんなことでもできるのです。(ピリピ 4:13)」主は、私が出来ないと言っているところで、その弱さを用いて働かれます。そして、

人には決してできないことを、成し遂げられます。救いというのは、神から始まり、そして神によって完成するのです。主は敢えて、私たちの弱さ、欠けを用いられて、ご自分の恵みを十分に満たされます。ですから、権力でもなく、能力でもない、わたしの霊によって、なのです。